

第6回GT関東研修大会 IN 東京 2017.11.10 前編

第38号 2017年11月20日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社カグヤ 奥山卓矢

GT 関東研修大会

2017年11月10日、GT 関東研修大会が東京都杉並区の芳澍女学院
情報国際専門学校 セレニティホールにて開催されました。

GT 関東研修大会は、GT 埼玉、GT 神奈川、GT 北関東、GT 東京の
持ち回りで研修会を年に一度実施しており、今回で6回目の開催と
なります。

今年度はGT 東京が担当し、標記の研修を企画しました。

<ねらい>

保育をめぐる世の中の情勢はめまぐるしく変化しています。この時勢
の中で私たちの理念を深めながら、保育園内外に向けて保育のあるべき形
を発信していくことは容易なことではありません。この研修では5名
の著名な先生から本質へのアプローチを学びたいと思います。

<日時>平成29年11月10日(金) 13:00~18:30

<場所>芳澍女学院情報国際専門学校 セレニティホール

<定員>170名

<内容>

保育所保育指針の改定 せいがの森子ども園園長 倉掛 秀人氏

書類改革、児童表 誠美保育園園長 折井 誠司氏

せいがチャンネル 新宿せいが子ども園職員 安藤 佳広氏

情緒的利用可能性 東京大学教授 遠藤 利彦氏

まとめ 新宿せいが子ども園園長 藤森 平司氏

本号では、「保育所保育指針の改訂」。次号では「まとめ」についての
講演録をお送りします。



「保育所保育指針の改定について」

せいがの森こども園 園長 倉掛秀人氏

—はじめに—

皆さんもいろいろと研修が始まって資料を読んでいると思うが、今回どんな風にしようかと思った。指針がどこへ向かっているのかを一緒に考えられたらと思った。お手元に資料が何もない理由をお伝えすると、資料が膨大で小嶋先生がCD-Rに焼くという話もしたが、せいがの森こども園のHPから10のファイルをダウンロードできるようになっているので、今日話している資料はそこで入手できることを最初にお伝えしておきます。指針の解説書はお手元にありますか、読んでいますか。この解説書は中央省庁が出しているもので、PDFや説明資料が出回っていると思う。指針、要領教育・保育要領の資料と参考にして頂きたいのが、社会福祉審議会の児童部会の専門委員会が10回くらい会議をやっている。厚労省のHPで議事録に乗っているのもそっちも見てもらいたい。後は出版社が出しているものがある。こういったものを使っていきたい。

—保育をシンプルにする—

今、子どもがこういう感じで大切だね、口の怪我が多いねとか、相手の気持ちが察しきれないとあると思うが、だから、どうしようと考えていると思う。その視点で考えていけば分かりやすいということを確認していきたい。もっとこうしてあげたいということが、私たちは素人ではないので、時代の要請やAIが増えれば、こういう社会になるからプランを考えている。見通しがあるからこうしよう、というのがある。こういうことをやればいいのだなというのを指示しているのが藤森先生。これが船だとすると、スタッフがいないと船は動かないし、計画も立てないといけない。きちんと考えないと船は動かない。それが園だったら園舎だったり、職員や計画だったり、それがしっかりしていないと行くのやめようとなってしまうので、社会的使命を考えておくことが園長目線ではある。やってみたがうまくいかないというのは、PDCAで考えていけばいい。頂いたテーマから考えると、園舎や職員を養成することも入っているが、計画や方針の所。そのよりどころとして、指針を使ってみたらどうかというスタンスで行きたい。

—3法令で共通するもの—

3法令で共通しているいい資料が見つかった。中央省庁が自治体向けに説明をしている。その中に共通の要素を入れたものを紹介する。影響を与えた要素は何だったのか、海外の研究成果、0～2歳が増え、乳児は5領域ではなく3つの視点になっている。また10の姿。中身を考えるとミマモリングソフトのM5に該当する。保育過程はどうなるのか。可視化はどうなるか、私からするとGTとして、藤森先生の保育を保護者や世間などに知らせたいと思っている。折井先生や安藤先生の見える化も面白いのでこのお話につなげたい。3法令の比較資料というのがある。変らないのは「環境を通した保育」。「資質能力」という言葉だが、もともと私は日本教育出版社にいた。学校の子どもたちを育てる時に、発達特性、個人的特性という言葉で表すときに、北尾さんという方が審議会で提案した平成以降の言葉です。3本の柱の「知識・技能の基礎」「思考力・判断力の基礎・学びの力」「人間性」の3つになっている。心配なのが最初に知識技能の基礎とあるので、幼児教育で発達を理解していない人にとって、これまでの見える学力に引っ張られていくのでは

ないかという懸念が今もある。これをどういう風に小学校の接続でどう考えていくか。幼児期までに育てたい姿は、到達目標ではなく、何かができる目標ではない。一般的に教育学では、方向目標ということが強調されている。乳児保育について厚くなったといっても、情動的な部分をどう育てるかを訓練させたり、我慢させていいのかということも危惧されている。解説を読んでみるとこんな感想を持った。解説がないとわからないような指針でいいのかというのが、そもそもあって、対照表を見ると、ほとんど変わっていないが意義が変わっている。3つが比較されている資料を見ると、まずは変遷からはじまる。指針についてはどこが出発だったかという、12月に1回目がありその議事録を読むと18人位の人で語られている。そこで虐待を防ごう、子育て支援を入れようというのはあまり今回の所では無理だと落ち着いた。今年の3月31日に3つが告示された。今年すでに8か月くらいが過ぎ、正式に4月からスタートする。環境を通して行うことが再確認されている。その環境の定義も明確に書かれ変わりません。資質能力は、この3つというのが高校まで同じ定義で行く。幼児期から大人になるまで学校教育の言葉が一貫して使われることになって、小中学校の要録も4つからこの3つに変わる。一文ずつを後でじっくり見てみたい。

—育みたい資質・能力—

- (1) 豊かな体験を通じて、感じたり、気づいたり、分かったり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」
- (2) 気づいたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力表現力等の基礎」
- (3) 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」

3つ目は私たちが大事にしている教育のねらいである、心情・意欲・態度が育つということ。5領域のねらいとここは、一致しています。子どもの気持ち感情、体験、感性を大事にしているのはここにつながっている。

—幼児期の終わりに終わりまでに育ってほしい姿—

(1) 健康な心と身体

【幼保連携型認定こども園における生活、幼稚園生活、保育所の生活】の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と身体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。

(あ、サッカー好きなのはわかるけど、あ、そこで蹴っちゃ、・・・) ※赤字はせいがの森こども園での事例

(2) 自立心

身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫しながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。

(えらいな、お当番さんだから、遊びを自分で切り上げて・・・) (お片付けも最後まで・・・)

(3) 協同性

友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

(Mくんが、お楽しみ会の主役か、お友達の役もかんがえてくれるかなあ・・・)

(4) 道徳性・規範意識の芽生え

友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。

(Mくん、わかっちゃいるんあけど、手がね、でも自分でやろうとは思っているんだよ・・・)

(5) 社会生活との関わり

家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考え関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、【幼保連携型認定こども園内外、幼稚園内外、保育所内外】の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして社会とのつながりを意識するようになる。(プラネタリウムに行った時…他の園の子どもたちもいて…園庭の隣の公園のフェンスに「ゴミは持ち帰りましょう」とのポスターを見て…)

(6) 思考力の芽生え

身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気づいたりし、考えたり、予測したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。

(紙コップに紐をつけた楽器で音を鳴らす遊びで、紐を布巾で擦っても「あ、鳴った」と教え合っていたり…)

(7) 自然との関わり・生命尊重

自然に触れて感動する体験を通して、身近な変化などを感じ取り、好奇心や探究心を持って考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることをもちかえりながら関わるようになる。(夏の間飼育したカブトムシ、死んじゃった、どうしよう)

(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要観に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。

(新しいボールを片付けていると「あと2個だよ、ここ」と協力していた)

(9) 言葉による伝え合い

【保育教諭等、先生、保育士等】や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどをコトバで伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。(絵本の読んでいたら、ああでもないこうでもない。食事の時間はもっぱら語り合い。職員室でも先生と一緒に冗談の言い合い、ピーステーブルもあるし、伝え合いは生活と遊びの中でいっぱい体験している。)

(10) 豊かな感性と表現

心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特性や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する味わい、意欲を持つようになる。

(アイドルごっこや落語がブームの年長さんたち。お楽しみ会が楽しみだ)

—改訂に大きな影響を与えた海外の研究。私たちが学ぶべきことは何か—

改訂に大きな海外の研究の何を見ればいいのか。藤森先生も講演でよく引用されているものがある。第2回社会福祉審議会 児童部会 保育専門委員会の海外の研究の資料の背景があり、乳児の項目を別々にしましょうとなった。この資料を見て、1,2歳児が全国の保育園にどれくらいいると思うか。46.5%二人に一人は保育園にいる時代。これだけいるというのは、保育園の役割が大きいと言わざるを得ない。そういう背景があり、海外の研修OECDなどで引用されるが、横軸は年齢、縦軸は脳の感受性を図表で表している。エモーションコントロール(感情のコントロール)。2歳くらいまでに感受性が高い時にランゲージ、二社関係スキル、数の曲線が並んでいる、幼少期の脳がこういう風に成長するので、幼児期が重要とよく使われる。アメリカの幼児健康発達研究所の追跡調査で保育の質の高さは、保育者の声掛けが、重要ということが分かって来た。保育者と子どもの関係が小学校3年生以降にいい効果が出るといわれている。質の高い保育と低い保育、高いほど発達がいいということが審議会で、イギリスの縦断研究の結果から、12の就学前学校みたいところで5つ言語的な能力が高いとか、子どものいざこざを解決するとかがある。藤森先生は、いざこざは大切だろうということで話がされている。子どもへ応答的であること、これはずっと提唱してきているそのもの。米国の調査でミシエルのマシュマロテスト。我慢する能力や方法を調べる調査で、1個もらうか、我慢して2個貰うか。2つ貰った子が44歳になった時にどうなったかと、10歳、17歳、39歳で追跡してこうでしたという調査。ペリー就学前教育も、ヘッグマンで有名になったもの。ミシガン州において低所得者層を対象に40年行った結果も出ている。かなり特異な環境の調査だと思う。就学前で言ったことを飛びつくのではなくて、ここに注目しようとGTで話してきたことをまとめると、情動のコントロール、愛着形成、自信、自発性など順番が大事、長い時間かけて行うこと。藤森先生が言っている、1歳児未満の時が担当性ぼくなっているのはおかしいということはない。NHKの人類の発達を見るとわかるように、お母さんたちは困っていて、力説されていた。保育のプロセスの良さは言葉や親の影響が大きく、子ども同士の影響は、研究がない。良いプレスクールは、マシュマロテストは我慢させることが大事なのではなく、子どもが工夫することが大事。自分から待とうとすることが大事。待たされて忍耐力がつくわけがない。

—乳児は新しい3つの視点—

乳児が新しくなったのは3つ。伸び伸びと育つ(身体的発達)。身近な人と気持ちを通じ合う(社会的発達)。身近なものとの関わり、感性が育つ(精神的発達)。ミマモリングソフトの人間関係の所。人間関係の所の幼児期までに育ててほしい姿があって、環境とも重なっているが、それぞれに人間関係のねらいは変わっていない。新しく入れ込んでみると、すっきり落ち着いたのでこれを使っていこうかと思っている。M5にすれば自動的に育ったということが分かる。ミマモリングソフトのM4に加えてM5ができる、方向目標として態度に近く、到達目標ではないから、末尾は「～ようになる」。なるというのは、述語ですのでその述語は、やや現在進行的な表現。

— 幼児の内容 —

幼児の方は最初に言ったシンプルに保育を考えたときに、何のことが分からない。指針だけを見ても分からないので、対照表で下線をついている所しかない。解説書にはどこがどう変わったかを読む。例えば、2章のねらいと内容が、大事なのだが、幼稚園教育要領の「保育の内容」にどこが変わったかが書いてある。人間関係では何を大事にしているか分かる。環境では、ここが足りないのではないかと言われ、海外の研究の成果も後押ししてくれている。内容の取扱いを読まないで、何で「ねらいと内容」になったかが分からない。この言葉を見ても、先生たちはこんな言葉を遣いながら、保育はしない。そこと繋がるために、解説書を書きぶりが違う。幼稚園は幼児の事例が多い。そちらの説明を読んだ方が分かりやすい。非認知的能力、社会情動的スキルは解説書には出てこないと思うが、無藤先生に聞いたら、難しいので「学びに向かう力」に変えたと言っていた。汐見先生だったらどうだろうと思って、非認知的能力、自己信頼感が大事だと書かれていて、解説書を読んだ。

— 保育課程はなくなったのか —

保育課程は確かに言葉は消えた。幼稚園、こども園教育要領には大枠の計画となって、どうして消えたかは謎。議事録を読むと文科省の抵抗。教育課程は学校なら使えるという感じ。汐見先生は、市販の解説書で保育園でも、幼稚園でもこの文章のことを全体的な計画と総称することになりましたと、言われている。計画の考え方、具体的なねらいについて、解説書には環境の構成には、「計画的な側面と子どもが環境の関わる中で生じる偶発的な側面とがある」と言い、保育計画には、必ずやってくることと、どうなるか分からないことを両方抑えること。これを計画して備える必要がある。たとえば言うなら、フリープランの海外旅行のようなもの。環境の再構成がいくらでもできるように行う。変更できるようにしておきましょうというもの。学校教育の間違った教育に引っ張られないこと。どう見える化していくか、ポートフォリオみたいなものに時間を割くことができないとしたらどう減らしていくかなのかなと思う。

本稿は、2017年11月10日に行われたG T 関東研修大会の内容をまとめたものです。

(文責/奥山卓矢)

参考サイト

1. [せいがの森こども園ホームページ](#)